

日本の伝統音楽のよさや面白さを実感しながら 音楽活動に取り組もうとする児童の育成

—— 音楽と生活や社会との関わりに着目した題材構想の作成と活用を通して ——

長期研修員 黒谷 英里

《研究の概要》

本研究は、小学校音楽科の日本の伝統音楽を教材とした学習指導において、音楽と生活や社会との関わりに着目した題材構想を作成し活用することで、日本の伝統音楽のよさや面白さを実感しながら音楽活動に取り組もうとする児童の育成を目指したものである。具体的には、音楽と生活や社会との関わりをつかむ手掛かりとして「遊び」「祭り」「仕事や自然」などと音楽との関わりに着目し、それらを意識した活動例を「つかむ」「追求する」「まとめる」の各学習過程ごとに示した。題材構想に基づいた学習を通して、音楽と生活や社会との関わりに出会い、それを発見し、確かめることで、児童が日本の伝統音楽のよさや面白さを実感しながら音楽活動に取り組もうとしていくことに有効であることを、授業実践を通して明らかにした。

キーワード 【音楽—小 日本の伝統音楽 生活や社会との関わり 題材構想】

群馬県総合教育センター

分類記号：G05-03 令和2年度 273集

I 主題設定の理由

中央教育審議会答申（平成28年12月21日）では、音楽科の課題として我が国や郷土の伝統音楽に親しみ、よさを一層味わえるようにしていくこと、生活や社会における音や音楽の働き、音楽文化についての関心や理解を深めていくことの更なる充実を図ることが挙げられている。これを受けて小学校学習指導要領（平成29年告示）解説音楽編における教科の目標に、表現及び鑑賞の活動を通して音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力の育成を目指すことが示された。この目標の実現のために、我が国の音楽に親しむ学習をより充実させることや、児童が学んでいること、学んだことを生活や社会との関わり視点から捉えた学習活動を積み重ね、児童の学びの自覚を促すことが大切である。このような学びの経験によって、生涯にわたって音楽を愛好する姿が期待される。

日本の伝統音楽は、生活や社会を含めた文化的背景をもって形づくられ継承されてきたものである。特に、日本語のもつ語感や、四季の変化を自然現象から感じ取る豊かな感性は、日本の音楽に深く影響を与えている。そのため、教材として積極的に扱い、音楽的な見方・考え方を働かせながら学習活動を積み重ねることで、児童は自らの生活や学習経験と照らし合わせて、日本の伝統音楽のよさや面白さを実感することができる。しかし、遊びの場面などでわらべ歌を聴いたり歌ったりする経験が少ないことに代表されるように、児童が日本の伝統音楽を自分にとって身近な音楽として捉えているとは言い難い。

研究協力校では、はばたく群馬の指導プランⅡに基づく題材構想及び授業実践を通して「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善を行っており、題材を通して身に付けさせたい力を明らかにしながら、ねらいとする児童の姿に迫れるよう一単位時間をつなげていく学習を展開してきた。その結果、題材を通じた学習の振り返りが習慣化され、児童が学んだことを自分なりに自覚できるようになるなど、一定の成果は上がってきている。一方、学習の振り返りの記述内容を吟味すると、学んだ知識や技能についての域を出ない記述が多いことから、児童が音楽を通して学んだことを生活や社会との関わり視点から捉え、今後の自身の生活や学習に生かしていきたいという意欲をもてるような授業改善が必要だと考える。

本研究では、それらの現状と課題を踏まえたうえで、児童に日本の伝統音楽への親しみをもたせ、さらに学びから得た気付きを次の学びに生かしながら、音楽のよさや面白さを実感できるようにするために、音楽と生活や社会との関わりに着目した具体的な手立てを明らかにした題材構想を作成し、活用していく。その活用を通して、日本の伝統音楽を生活や社会との関わり視点から捉え、よさや面白さを実感しながら音楽活動に取り組もうとする児童を育成することができると考え、本主題を設定した。

II 研究のねらい

小学校音楽科における日本の伝統音楽を教材とした題材において、音楽と生活や社会との関わりに着目した題材構想を作成し活用することによって、音楽を生活や社会との関わり視点から捉え、よさや面白さを実感しながら音楽活動に取り組もうとする児童を育成することができることを明らかにする。

III 研究仮説（研究の見通し）

日本の伝統音楽を教材とした音楽科指導において、音楽と生活や社会との関わりに着目した題材構想を作成し活用することによって、音楽と生活や社会との関わりを手掛かりとして、よさや面白さを実感しながら音楽活動に取り組もうとする児童が育成できるであろう。

1 つかむ過程では

体験的に日本の伝統音楽に親しむ活動を設定することで、児童は、音楽と生活や社会との関わりに出会い、その視点から、音楽のよさや面白さを追求したいという思いをもつことができるであろう。

2 追求する過程では

協働的に表現を試行する活動を設定することで、児童は音楽と生活や社会との関わりを発見しながら、音楽のよさや面白さを実感し、表現を追求することができるであろう。

3 まとめる過程では

表現をつないで一つの音楽にまとめる活動を設定し、音楽と生活や社会との関わりを確かめながら題材の学習を振り返ることで、児童は音楽のよさや面白さを生かした表現の高まりを実感し、今後の学習や生活の中に生かしたいという意欲をもつことができるであろう。

IV 研究の内容

1 基本的な考え方

(1) 日本の伝統音楽とは

「我が国の音楽」という意味で、「我が国の風土の中で自然や人間の営みにおける多様なものやことと一体化して生まれ、受け継がれてきた」（『日本伝統音楽カリキュラムと授業実践』より）日本の音楽の総称である。学習指導要領では、「我が国や郷土の伝統音楽」と示されている。様々な時代に生まれた音楽が姿を変えこそすれ、廃れることなく現代に継承されているため、その種類は多岐にわたる。本研究では、児童が演奏場面を想像し、音楽と生活や社会との関わりを想起しやすい「わらべ歌」、「祭囃子」、「民謡」を取り上げる。

(2) よさや面白さを実感しながら音楽活動に取り組もうとする児童とは

音楽から感じ取ったよさや面白さと、音楽を形づくっている要素の働きとの関わり合いを、実感を伴って捉え、音楽的な見方・考え方を働かせながら音楽活動に取り組む児童の姿を指す。例えば祭囃子を教材とした題材では、祭囃子の音楽がリズムや強弱の変化によってお祭りの盛り上がる雰囲気を表しているよさや面白さを、各学習過程の中で実感しながら捉え、それを手掛かりにさらに聴き味わったり表現をよりよくしようとしたりしながら取り組む姿を指す。また、祭囃子が祭りの中でどのような働きや役割を果たしているかという視点から題材全体を振り返り、「他の祭囃子も聴いてみたい」「地域の祭囃子の演奏に挑戦してみたい」など、捉えたよさや面白さを生かして次の学びに向かおうとする姿を指す。

(3) 音楽と生活や社会との関わりに着目した題材構想とは

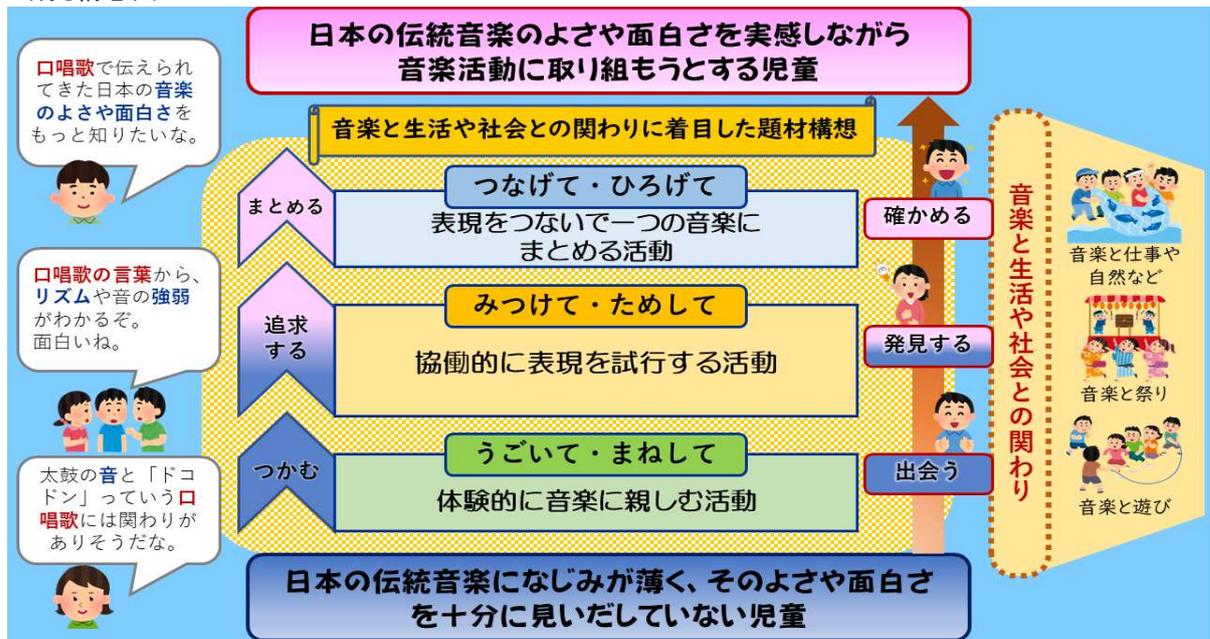
児童が日本の伝統音楽のよさや面白さを見だし、それを実感することができるようにするためには、日本の伝統音楽に親近感や愛着をもって親しむことができるようにすることが大切である。そのために、音楽と生活や社会との関わりに着目し、わらべ歌を扱う題材では、音楽と遊びとの関わり、祭囃子を扱う題材では、音楽と祭りとの関わり、民謡を扱う題材では、音楽と仕事や自然などとの関わりなどを取り上げ、音楽を身近に感じながら、そのよさや面白さを追求できるような題材を構想する。学習過程に沿って、「つかむ」過程では、音楽と生活や社会との関わりに出会う活動例、「追求する」過程では、音楽と生活や社会との関わりを発見する活動例、「まとめる」過程では、音楽と生活や社会との関わりを確かめる活動例を、発問や問い返しなど教師の働き掛けの具体例と併せて提示する。

音楽と生活や社会との関わりに着目した各学習過程のポイントについて、以下のように示す。

過程	生活や社会との関わり	ポイント
つかむ	出会う 『うごいて・まねして』	児童が音楽と生活や社会との関わりに出会うことができるよう、遊びや仕事など体の動きを伴う活動や、民謡の発声や抑揚をまねして歌う活動、太鼓のリズムを口唱歌で歌いながら演奏の疑似体験をする活動など、体験的に音楽に親しむ活動例を示す。
追求	発見する 『みつけて・ためして』	児童が音楽と生活や社会との関わりを発見し、それを手掛かりにして音楽のよさや面白さを実感しながら表現を追求できるよう、つかむ過程

す る		や前時までの気づきを生かしながら、協働的に表現を試行する活動例を示す。
ま と め る	確かめる 『つなげて・ひろげて』	児童が音楽のよさや面白さを生かした表現の高まりを実感し、それを今後の学習や生活の中で生かしたいという意欲をもつことができるよう、追求する過程でつくった音楽をみんなでつなげて表現し、音楽と生活や社会との関わりを確かめながら、題材全体の学びを振り返る活動例を示す。

2 研究構想図



V 研究の計画と方法

1 授業実践の概要 (※印は郷土に伝わる音楽)

対 象	研究協力校 小学校第1学年 75名
実践期間	令和2年10月21日～11月4日 4時間
題材名	「にほんのうたをたのしもう」 (A 表現(1)歌唱(3)音楽づくり)
教材曲	「さんちゃんが」(絵描き歌) 「おおなみこなみ」(遊び歌) 「いちじくにんじん」(数え歌) ※「どれにしようかな」(群馬県ほか)
題材の目標	曲想と音楽の構造などとの関わりについて気付くとともに、表したい音楽表現をするために必要な技能を身に付け、曲想を感じ取って表現を工夫したりし、歌い方や遊び方について思いをもって日本の歌を楽しむ。
対 象	研究協力校 小学校第3学年 76名
実践期間	令和2年10月20日～11月10日 5時間
題材名	「ちいきにつたわる音楽でつながろう」(A 表現(2)器楽(3)音楽づくり B 鑑賞)
教材曲	「祇園囃子」 「ねぶた囃子」 「神田囃子『投げ合い』」 ※「地域の祭りのお囃子」(群馬県)
題材の目標	曲想と音楽の構造などとの関わりについて気付くとともに、祭囃子の特徴が生み出す曲や演奏のよさを見いだして聴いたり、発想を生かした表現をするために必要な技能を身に付けたりしながら、捉えた日本の楽器の音や雰囲気を生かして即興的に表現し、地域に伝わる音楽に親しむ。
対 象	研究協力校 小学校第5学年 29名

実践期間	令和2年10月26日～11月13日 5時間
題材名	「日本の音楽の秘密を見つけよう」 (A 表現 (3) 音楽づくり B 鑑賞)
教材曲	「ソーラン節」 「刈り干し切り歌」 「江戸の子守歌」 (律音階・都節音階) ※「八木節」(群馬県)
題材の目標	曲想と音楽の構造などとの関わりについて理解するとともに、日本の音楽の特徴が生み出す曲や演奏のよさを見いだして聴いたり、思いや意図に合った音楽表現をするために必要な技能を身に付けたりしながら、日本の音楽の特徴を捉えた旋律のつくり方を工夫し、日本の音楽に親しむ。

2 検証計画

	検証の視点	検証の方法
見通し1	日本の伝統音楽と出会う場面において、教師が体験的に音楽に親しむ活動を設定することは、児童が音楽と生活や社会との関わりに出会い、その視点から、音楽のよさや面白さをもっと追求したいという思いをもつ上で有効であったか。	・授業中の体の動きや表情の観察 ・教師の働き掛けによる児童の反応
見通し2	教師が協働的に表現を試行する活動を設定し、発問などによって働き掛けることは、児童が、音楽と生活や社会との関わりを発見しながら、音楽のよさや面白さを実感し、表現を追求していく上で有効であったか。	・グループ活動の観察 ・振り返りの記述
見通し3	教師が表現をつないで一つの音楽にまとめる活動を設定し、音楽と生活や社会との関わりを確かめながら、題材の学習を振り返ることは、児童が音楽を今後の学習や生活の中に生かしたいという意欲をもつ上で有効であったか。	内容(各単位時間・題材全体) ・授業者への聞き取り

3 指導計画および評価規準(※別紙資料を参照)

VI 研究の結果と考察

音楽と生活や社会との関わりに着目した題材構想を基に、1年生では「にほんのうたをたのしもう」の題材において、「クラスのオリジナルわらべ歌をつくって、歌遊びで楽しむ」ことを目指して授業実践を行った。3年生では「ちいきに伝わる音楽でつながろう」の題材において、「グループのオリジナル祭太鼓をつなげて、クラスの祭囃子をつくって楽しむ」ことを目指し、5年生では、「日本の音楽の秘密を見つけよう」の題材を設定し、日本の音階を使ってつくった各グループの旋律を「日本の音楽カレンダー」としてつなげて表現することを目指して授業実践を行った。研究の見通しに沿って、つかむ過程及び追求する過程においては、授業実践の実際の視点から、まとめる過程においては授業実践の実際に、振り返りシートの記述の視点を加えて検証を進める。

1 つかむ過程における「体験的に音楽に親しむ活動」(うごいて・まねして)

(1) 第1学年 わらべうたのよさや面白さを、遊びの動きを通して感じ取る場面

絵描き歌『さんちゃんが』では、実際にたぬきの絵を描く動作に合わせて歌いながら、曲に親しむ活動を行った。以下は、活動中の教師からの働き掛けと児童の受け答えの様子である。

T: わらべうたのおもしろかったところはどこかな。

S1: 「ぼくたぬき」の「たーぬき」って伸ばすところがなんだか楽しかったよ。

T: どうしてそこは伸ばして歌うのかな。

S2: たぬきのまあるい大きなおなかを描くから、伸ばして歌うんだよ。

S3: もっと伸ばして歌ったら、すごく大きなおなかを描けそうだよ。

児童が感じ取った音楽のよさや面白さの理由を問い返す教師からの働き掛けにより、児童は、絵描き歌の腕の動かし方と、音楽との間に関わりを見だし、さらに、より絵描き歌が楽しくなる方法についても発言していた。また、『おおなみこなみ』で、歌に合う動きを考え、身振りを付けながら曲に親しんだところ、「おおなみ」で大きくなったり「こなみ」で小さくなったりする身振りや、「猫の目」の「目」でポーズがタイミングよく決まる楽しさを味わっている児童の姿が見られた。活動の後には、「歌と動きがぴったり重なっておもしろい」という発言があり、児童が音楽と遊びとの関わりを手掛かりに、感受したことを自分たちの遊び方に生かしてみたいという思いをもち、音楽と生活や社会との関わりに出会うことができたと考えられる。

(2) 第3学年 祭囃子のよさや面白さを、祭りの動きや楽器の演奏を模倣しながら感じ取る場面

『ねぶた囃子』では、太鼓の口唱歌「ダダダ ダンダン ダーダダダ」を唱えながら、太鼓のリズムを模倣することで、弾むようなリズムを感じ取る活動を行った。繰り返すうちに、リズムに合わせて体が自然と動き出す児童が出てきた。そこで、踊り手である「跳人」の動きを模倣する活動を取り入れたところ、太鼓のリズムの強弱に合わせて足を踏み鳴らす児童の姿が見られた。

T：なぜ、足を大きく踏み出すところとそうではないところがあるのかな。

S1：太鼓の音の強さが（リズムによって）変わっているから。

T：太鼓の音の強さが変わると、お囃子はどんな感じになるかな。

S2：面白くなって、だんだんお祭りが盛り上がる感じがします。

児童の体の動きの変化を捉え、直ぐにその理由を問う教師からの発問や問い返しによって、児童は、祭囃子の太鼓のリズムと体の動きとの間に関わりを見だし、感じ取ったお囃子の面白さを、祭りの場面と関連付けて発言していた。このことから、児童が音楽と祭りとの関わりを手掛かりに、生活や社会との関わりに出会うきっかけをつかみ、さらに面白さを追求したいという思いをもつことができたと考えられる。

(3) 第5学年 民謡のよさや面白さを、仕事の動きや発声方法を模倣しながら感じ取る場面

仕事歌である『ソーラン節』『刈り干し切り歌』では、仕事の動作を模倣しながら聴くことで、作業の様子や動きと音楽とのつながりを見いだす活動を行った。より実感を伴った活動ができるよう、ニシン漁の網を模した網や、草刈りの鎌の柄を模した棒を用いた。数名の児童にそれらの道具を持たせ、仕事の場面を想像させた上で、歌に合わせて仕事の模倣をするよう促した（図1）。

始めは、模倣する児童の姿を観察しながら鑑賞していた周りの児童が、次第に動きに合わせて歌を歌ったり、掛け声や合いの手を入れたりして、仕事の動きを盛り立てる様子が見られた。

T：作業の動きをまねしながら『ソーラン節』を聴いてみて、どんなことに気付きましたか。

S1：（作業を模倣した児童）みんなが歌う声に合わせて、網を引く動きが揃ってきました。

T：歌っているみんなの声の出し方は、合唱の時の声と同じだったかな。

S2：合唱の声だと、仕事の場面と合わないよ。

T：どんなふうに歌ったのかな。もう一度歌ってみよう。

（もう一度、仕事の場面に合った発声で歌った後）

T：合唱の時の発声と違うところはどこかな。

S3：地声で、お腹に力を入れて声を出しました。

作業の様子を疑似体験することによって、児童は音楽と作業の動きとの間に関連を見いだす発言をしていた。また、仕事を模倣する様子に合わせて歌う児童の発声方法に目を向けられるような教師の発問や問い返しなどの働き掛けによって、児童は民謡の発声方法についても気づき、発言していた。さらに拍のない追分様式の『刈り干し切り歌』の発声を模倣する活動では、草の生い茂る山



図1 ニシン漁の作業を模倣する様子

に分け入って作業するため、自分の居場所を知らせる役割があったことや、歌声を競い合っていたことなど、歌の背景についても知らせ、背景を想像しながら模倣するように促した。音を長く引き伸ばすのは、遠くまで聴こえるようにするためであるとか、こぶしなどの節回しの華やかさは、歌声を競い合う中でより印象に残るようにするためであるなどの発言が得られ、児童が音楽と仕事などとの関わりを手掛かりに、音楽と生活や社会との関わりに出会い、さらに他の民謡についても調べてみたいという思いをもつことができたと考えられる。

これらの児童の姿から、日本の伝統音楽との出会いの場面において、体験的に音楽に親しむ活動を設定することは、児童が、音楽と生活や社会との関わりに出会い、その視点から、音楽のよさや面白さを追求したいという思いをもつことに有効であったと考えられる。

2 追求する過程における「協働的に表現を試行する活動」(みつめて・ためして)

(1) 第1学年 つかんだわらべ歌のよさや面白さを生かして、自分たちのわらべ歌をつくる場面

つかむ過程から前時まで、音高の変化を手の高さで表したり、体を縮めたり伸ばしたりする動きで感じ取ったりしながら、わらべ歌に親しむ活動を行った。その結果、児童は言葉の抑揚と音高の上がり下がりとの間に関わりがあることに気付く(図2)、言葉に合った音の高さを探りながらわらべうたをつくる活動へつながった(図3)。以下、グループで表現を追求する活動中の児童の会話の様子である。

(全員で手を動かしながら)

S:(全員)「あーきーにーはー」

S1:「き」のところが音の高さが変わっているよ。

S2:高くなっているのかな。

S1:そうだと思う。

S3:「は」はどうかな。上がるのかな、下がるのかな。

S4:変わらない気がするけど、歌って確かめよう。

(全員で、二通りの音の高さを確かめて)

S3:やっぱり、最後は上がる感じが合うんじゃないかな。

S:(全員) そうだね。

4人グループで、意見を出し合い、試行錯誤しながら言葉の抑揚に合った音の高さを探り、つくった節が全体で共有できるよう、簡易楽譜で可視化した(図4)。

このようにして、言葉の抑揚に焦点を当て、教師からの発問で働き掛けたり、協働的に表現を追求したりすることで、児童は、音楽と遊びとの関わりを手掛かりに、音楽と生活や社会との関わりを発見しながら、自分たちの選んだ言葉に合った音楽をつくりたいという思いを膨らませることができたと考えられる。

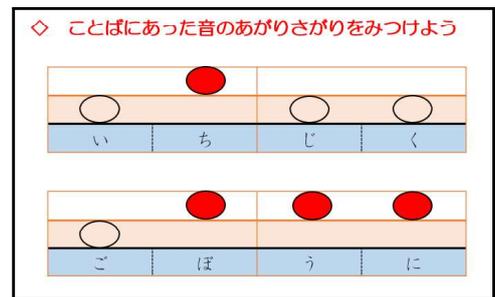


図2 言葉の抑揚に合った音高を示した掲示物



図3 音の高さを試行して探る様子



図4 つくった節の簡易楽譜の例

(2) 第3学年 つかんだ太鼓のリズムの特徴を生かして、グループの祭太鼓のリズムをつくる活動

つかむ過程から前時まで、実際の祭囃子の口唱歌を歌ったり、口唱歌で示した太鼓のリズムパターン(次ページ図5)を歌ったり、リズム打ちをしたりすることで太鼓のリズムの特徴を感じ取りながら(次ページ図6)、長胴太鼓に親しむ活動を行った。その結果、児童は口唱歌の語調や響きから、音の強弱との関わりを見だし、リズムの特徴を生かしたつなげ方を探りながら祭太鼓のリズムをつくる活動へつながった(次ページ図7)。

(口唱歌を歌いながらリズム打ちをした後で)
 T：①のリズムと②のリズムの違いはどこかな。
 S1：真ん中が「ドコ」に変わっています。
 T：変わると太鼓の感じは同じかな、違うかな。
 S2：違います。「ドコ」は、「ドン」と比べて、軽やかな感じがします。
 T：なるほど、太鼓を実際に打たなくても、口唱歌の言葉がもつ雰囲気から、リズムの特徴をつかむことができましたね。

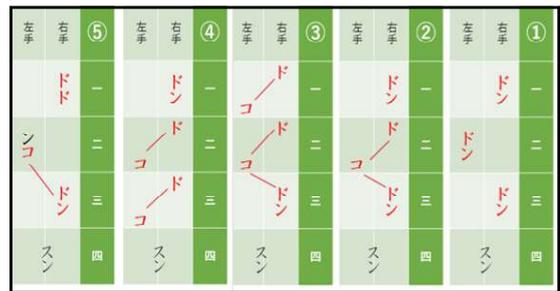


図5 口唱歌によるリズムパターン

さらに、毎時間の導入の際、口唱歌で示したリズムパターンを用いて、リズムリレーをする活動を取り入れた。リズムがつながることで、音楽からどんな印象を受けるかを問い掛け、祭りの場面や様子などのイメージと結び付けながら、音楽づくりの発想のヒントを得られるようにした。

- | | | |
|---------|---|---------------------------------|
| ①ドンドンドン | → | 力強い・重たい
<u>山車の出発</u> |
| ②ドンドコドン | → | ①よりも軽やか |
| ③ドコドコドン | → | 「ドコ」が2回続くから軽やか
最後の「ドン」が強調される |
| ④ドンドコドコ | → | ③と反対に「ドン」が最初に来ているから印象に残る |
| ⑤ドドンコドン | → | 弾む感じ
<u>ねぶた囃子みたいなお祭り</u> |
- ※二重線はリズムから想像した祭りのイメージ

T：①から⑤を順番につなげてリズムを打つと、どんな感じがしますか。
 S1：つながると、変化があつてお祭りらしい感じがします。

図6 児童が口唱歌からつかんだリズムの特徴

T：⑤から①と、順番を変えてみたら、感じ方は同じかな、変わるかな。
 S2：逆にすると、最後が「ドンドンドン」で、お祭りが終わる感じがします。
 T：同じリズムを使っているけど、つなげる順番によって、感じ方が変わりそうですね。
 T：(①のみを4回繰り返し打った後) 今のリズムはどういうつながり方になっていたかな。
 S3：ずっと①を繰り返していました。
 T：繰り返すとどんな感じがしますか。
 S4：同じリズムが続くから、覚えてしまうくらい印象に残るけど、何だか物足りないな。



図7 グループで試行する様子

T：楽しくするにはどんなことが考えられますか。たとえば、②や③は、強調される部分があるから面白いのだったよね。
 S5：打ち方の強弱を変えてみたら面白そうだよ。
 (強弱に変化をつけて、①のリズムを繰り返し打つ)
 S6：同じリズムが続くときは、打ち方に変化をつけると楽しくなるね。試してみたいな。
 T：①の「ドンドンドン」が続くと、お祭りのどんな場面が想像できましたか。
 S7：同じリズムでも、だんだん大きくなるように打つと盛り上がる感じがするから、だんだん人が集まってきて、お祭りの始まりを知らせる合図のような感じがします。
 S8：リズムのつなげ方や打ち方を工夫することで、いろいろなお祭りの場面が表せそうだね。

このような教師と児童とのやり取りによって、音楽と祭りの場面や様子との関わりについて手掛かりをつかんだ後、グループで表現を試行する活動を行った。口唱歌とリズム打ちのみで試行し、つなげ方や打ち方がまとまった後、実際に太鼓で打って演奏して、イメージ通りの音楽になったかどうかを確認した(次ページ図8)。表現が仕上がったグループが太鼓を打つと、周りの児童が自

然に「ソレ」「ヨイショ」などの掛け声や合いの手を入れるなどして、太鼓の演奏を盛り上げる様子が見られた。「なんだか本当にお祭りに来ているみたいだね」との発言があり、太鼓の音を介して学級全体が協働して祭りの雰囲気を持ち上げ、体感する様子が見て取れた。

このように、口唱歌や、祭りの場面や様子に焦点を当て、協働的に表現を試行する活動を設定したり、発問を通して働き掛けたりすることで、児童は、音楽と祭りとの関わりを手掛かりに、音楽と生活や社会との関わりを発見しながら、自分たちのイメージする祭りの雰囲気をよりよく伝えたいという思いをもって音楽づくりに取り組むことができたと考えられる。



図8 長胴太鼓でイメージを確認する様子

(3) 第5学年 つかんだ音階の特徴を生かして、グループの「日本を紹介する旋律」をつくる活動

つかむ過程から前時まで、民謡や江戸の子守歌（律旋法、都節旋法）を歌いながら鑑賞することで、児童は、日本の音楽の特徴は、五音音階にあることを知った。その上で教具として「民謡音階」「都節音階」の構成音のみを残して他の音板を外したミニグロッケンを用意し、音階の上行形・下行形を演奏して確かめたり、即興的な旋律遊びをしたりしながら二つの音階に親しむことで、それぞれの音階がもつ雰囲気やイメージを捉える活動を行った（図9）。



図9 旋律遊びで日本の音階に親しむ様子

T：二つの音階には、どんな違いがありますか。

S1：どちらも和風の雰囲気が想像できるけれど、都節音階は暗い感じがします。

T：都節音階からは、どんな日本らしさが想像できましたか。

S2：お正月の音楽みたいです。神社に流れていそう。

T：民謡音階からは、どんな日本らしさが思い浮かびますか。

S3：明るい感じがするから、『ソーラン節』のような元気が出る民謡（の雰囲気）。

S4：お祭りの感じも表せそうだね。

音階から感じ取ったことから、どんな日本らしさが思い浮かぶかを問い掛け、児童から引き出した発言を「イメージ宝箱」として表にまとめて掲示した（図10）。

このような活動から得られた二つの音階のイメージと、旋律づくりが円滑に進むように提示した三つのリズム例（図11）を手掛かりに、自分たちが表現したい日本らしさのイメージにふさわしい音階やリズムを選び、3人グループで協働して旋律づくりを行った。

以下、グループを一つ抽出して、表現を練り上げる過程を追う。

<グループAの活動>

児童A、B、Cの3名は、民謡音階のもつ明るさから着想を得て、旋律づくりに取り組んだ。

♪ 日本の音階イメージ宝箱	
都節音階	民謡音階
しっとり、もの悲しい、お正月、神社	のどかな、明るい、仕事歌、わらべ歌、

図10 日本の音階イメージ宝箱(掲示物)

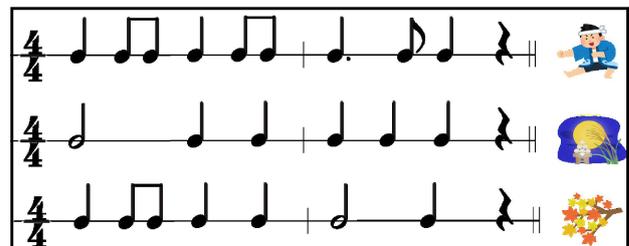


図11 民謡や日本古謡、唱歌のリズム例

児童Aは、鑑賞でつかんだ民謡のよさを生かし、仕事歌から感じ取った元気さや明るさを表現したいという思いをもった。そこで、『ソーラン節』を想起させるリズムを選び、気持ちの高揚を音高を上げていくことで表現した(図12)。

	ミ	ソ	ラ	レ	シ	ソ	レ	
$\frac{4}{4}$	♪	♪♪	♪	♪♪	♪	♪	♪	♪
ミ								
レ								
シ								
ソ								
ラ								
ミ								

図12 児童Aの旋律

児童Bは、唱歌『もみじ』のリズム例から着想を得て、秋が深まり、もみじが赤く色づいていく様子を、音高を次第に高くしていくことで表現した(図13)。

	ミ	ララ	ソ	ラ	ソ	レ	
$\frac{4}{4}$	♪	♪♪	♪	♪	♪	♪	♪
ミ							
レ							
シ							
ソ							
ラ							
ミ							

図13 児童Bの旋律

児童Cは、児童Bと同様に、もみじの美しさを表現したいと考え、唱歌『もみじ』のリズム例を用いた。音高が上行するように音を選んだり、下行するようにしたり返りなど繰り返し試行した結果、上行形の旋律を選んで表現した(図14)。ワークシートの記述には、「民謡音階の明るさをより際立たせるように音の上がり下がりを考えて、もみじの美しさを伝えられるようにした」との記述があり、表現したいイメージと音との関わりを意識しながら旋律づくりをしたことが伺える。

	ミ	ソ	ラ	ラ	レ		ミ
$\frac{4}{4}$	♪	♪♪	♪	♪	♪		♪
ミ							
レ							
シ							
ソ							
ラ							
ミ							

図14 児童Cの旋律

それぞれが作った旋律を持ち寄り、グループの旋律としてつなげ方を考える活動では、児童Bと児童Cの旋律が共にもみじの美しさを表現していることや、児童Aの旋律から秋の野山で草を刈る仕事歌をイメージしたこと、「日本の秋のいいところ」をテーマに据えた。そして、児童B、児童Cの旋律が似ていることと、児童Aの旋律のもつ面白さをどのように生かすかということ視点を、テーマに合った音楽にするためのつなげ方を試行した。試行するうちに、児童Aの旋律の違いをより特色付けたいという思いや、自分たちがイメージする日本の秋のよさを、民謡音階のもつ明るさをより強調することで表してみたいという思いが浮かんできた。そこで、終止音が最も高い児童Cの旋律を始め(1番目)と終わり(4番目)に置き、2番目に児童Cと似ている児童Bの旋律をつなげ、3番目に特色ある児童Aの旋律をつなげることで、変化する面白さが伝わるように表現を工夫した。

このように、仕事や自然などに焦点を当て、発問を通して働き掛けたり、協働的に表現を追求する活動を設定したりすることで、児童は、音楽と仕事や自然などとの関わりを手掛かりに、音楽と生活や社会との関わりを発見しながら、日本の自然のイメージを音楽で伝えたいという思いや意図を膨らませ、音楽づくりに取り組むことができたと考えられる。

これらの児童の姿から、音楽と遊びや祭り、仕事や自然などとの関わりを手掛かりに、協働的に表現を追求する活動を設定し、教師の発問などによって働き掛けることは、児童が音楽と生活や社会との関わりを発見しながら、音楽のよさや面白さを実感し、表現を追求することにおいて有効であったと考えられる。

3 まとめる過程における「表現をつないで一つの音楽にまとめる活動」(つなげて・ひろげて)

(1) 第1学年 クラスのオリジナルわらべ歌に合わせて、遊び方のアイディアを出し合いながら歌遊びを楽しむ場面

① 授業実践の実際

追求する過程でグループごとに試行した旋律を持ち寄ってつなげ、クラスのわらべ歌としてまと

めた（図15）。音高の変化を手の動きで表しながら全員で歌い、音楽と言葉の抑揚との関わりについて確かめた。わらべ歌をもっと楽しくするための工夫を問い掛けたところ、絵描き歌『さんちゃんが』で学んだ弾むリズムで歌うことや、数え歌『いちじくにんじん』に親しむ活動で経験した、一節ごとに交替して呼びかけ合うように歌うことなど、題材の学習での経験を想起しながら、歌い方を視点に様々なアイデアを出した。それらを試行し、繰り返し歌ったところ、次第に歌に合わせて体を動かす様子が見られたため、歌に合った身振りを付けることを提案した。始めは児童の考えた身振りを付けて歌い遊ぶ活動が、身振りを付けつつ拍に合わせて歩きながら歌う活動や、グロックンを使った簡単な伴奏遊びをしながら歌う活動に発展した（図16）。このように題材での学びの経験を生かし、音楽と遊びとの関わりを実感しながら、わらべ歌遊びを全身を使って楽しむ児童の姿が見られた。音楽がもつ生活や社会との関わり視点から題材全体を振り返ったところ、図17のような記述が見られた。

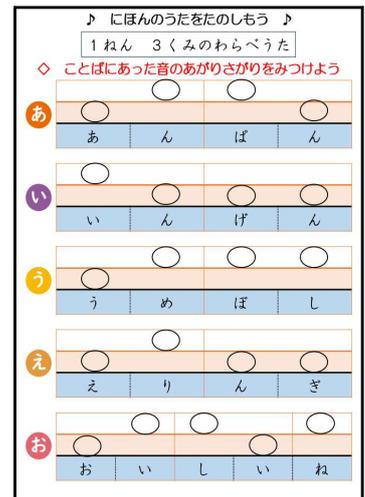


図15 クラスのわらべ歌

② 振り返りシートの記述から

日本の歌（わらべ歌）の学習を通して感じたことや考えたことについて児童の記述を分析したところ、「活動に対する感想」「学習を通して得られた知識についての記述」「次の学びにつながる記述」に分類された。



図16 伴奏遊びをする様子

記述内容から、児童は協働して歌をつくる喜びを感じながら活動することで友達とのつながりに気付いたり、音楽と言葉との関わり、音楽と遊びとの関わりに気付いたりしながら、音楽のよさや面白さを追求し実感することができたと考えられる。また、これからもわらべ歌で遊びたいか、という質問には、75名中60名の児童が「はい」と回答した（「いいえ」2名、無回答13名）。その理由として挙げられた、「いろいろなわらべ歌を知ってみんなで楽しく遊びたいから」や「これからも歌をつくっておうちでも歌いたいから」などの記述から、題材を通して学んだことを自分の生活の中に進んで生かしたいという意欲をもつことができたと考えられる。

ア 活動に対する感想

- ・みんなうたがつくれてたのしかった。
- ・ふりつけをかんがえてあそんだことがたのしかった。
- ・りずむやうたにあわせてあそべたのしかった。

イ 学習を通して得られた知識についての記述

- ・音のたかさがよくわかった。
- ・ことばとおと(りずむ)はかんけいがある。
- ・にほんのうたをたくさんおぼえて、あそびかたもおぼえられた。

ウ 次の学びにつながる記述

- ・にほんのうたについてもっとしりたい。(うたをもっとつくりたい)
- ・いすとりげーむやなわとびにもあうわらべうたをしりたい。

図17 振り返りの記述内容（1年生）

(2) 第3学年 グループの祭太鼓を演奏し合い、笛や鉦の音を加えてクラスの祭囃子を楽しむ場面

① 授業実践の実際

追求する過程でつくったグループの祭太鼓のリズムを発表し合う際、グループの表現のよさや面白さからどんな祭りの場面が想像できるかを問い掛けた。グループで練り上げた表現は、口唱歌で記述し、さらに打ち方の工夫については大・中・小の3段階に分けた丸印の大きさを表すことで可視化した（図18）。聴き手の児童にとって、口唱歌の言葉のもつ雰囲気や可視化された強弱によって、容易に太鼓のリズムの特徴や打ち方の工夫をつかむことができ、グループの表現のよさや面白さを実感しながら聴く様子が見られた。つなぎ方の工夫から、呼びかけ合っ

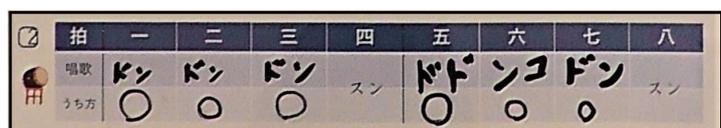


図18 グループの祭太鼓のリズムを可視化したワークシート

た。つなぎ方の工夫から、呼びかけ合っ

だん人が集まってくる祭りの場面を想像できたという発言や、強弱が細かく変化する面白さから、神田囃子『投げ合い』を想起して、神輿が集まりにぎやかな祭りの場面を想像できたという発言があった。

グループの祭太鼓のリズムをもっと祭りらしくするために、リコーダーによる笛の旋律のパターンを示し、パターンの中から自分たちの祭太鼓のイメージに合った旋律を選択して、祭太鼓の演奏に合わせて、合いの手で掛け声や鈴を用いた鉦の音を入れたりして、クラス全体で祭りの音楽を楽しむ活動を行った。活動中の児童の行動や発言から、合いの手が入ることで、太鼓のリズムが整うことよさや、太鼓と笛、鉦の音の重なりを味わうことで、より祭りの場面が表現できる面白さを実感する様子が伺えた。題材全体を通した振り返りをしたところ、図19のような記述が見られた。

② 振り返りシートの記述から

地域に伝わる音楽（祭囃子）に親しむ学習を通して感じたことや考えたことについて、児童の記述内容を分析したところ、「音楽の役割について考えたこと」「学習を通して得られた知識についての記述」「次の学びにつながる記述」に分類された。

ア	音楽の役割について考えたこと
	<ul style="list-style-type: none"> ・お囃子は、祭りを盛り上げるためにあるんだと思った。 ・お囃子は場面ごとに違って、音楽で様子を表している。 ・地域によってお囃子は違うが、どれもみんな楽しく元気になれるようにつくっていると思う。
イ	学習を通して得られた知識についての記述
	<ul style="list-style-type: none"> ・長胴太鼓は打ち方によっていろいろな音が出せる。 ・掛け声や合いの手の役割が分かった。 ・口唱歌は伝統を受け継ぐ方法。歌うことで重い音や軽い音を想像することができた。 ・県や市、町内会によってそれぞれ違う、いろいろな祭囃子があることが分かった。
ウ	次の学びにつながる記述
	<ul style="list-style-type: none"> ・地域のお囃子について、もっと詳しく知りたい。 ・つくったお囃子を地域の人にも聴いてもらって、みんなを笑顔にしたい。

図19 振り返りの記述内容（3年生）

記述内容から、題材の学習を通して、協働して祭太鼓のリズムをつくる楽しさ

を感じながら活動することで友達とのつながりに気付いたり、音楽と口唱歌との関わりや、音楽と祭りの場面や役割との関わりに気付いたりしながら、音楽のよさや面白さを追求し実感することができたと考えられる。また、学んだことをこれからの生活に生かしたいか、という質問には、76名中64名の児童が「はい」と回答した（「いいえ」5名、無回答7名）。その理由として挙げられた、「地域の祭りに参加して、山車に乗って太鼓を演奏したいから」や「地域の祭りに行ったとき、お囃子の太鼓のリズムがどのようになっているのかを考えながら聴きたいから」などの記述から、実際に祭りに参加したいという意欲や、「面白い音や楽しい音をイメージして、生活を楽しくしたいから」や「和太鼓に限らず、強弱を工夫して場面に合った曲を演奏したいから」などの記述から、題材で学んだことを自分の生活や今後の学習の中に進んで生かしたいという意欲をもつことができたと考えられる。

(3) 第5学年 グループの旋律をつなげて演奏し、「日本の音楽カレンダー」にまとめる場面

① 授業実践の実際

追求する過程で練り上げたグループの日本らしさを表す旋律を、表現した季節や場面に即して、春夏秋冬の順につないで演奏した。一つの曲にする特性上、民謡音階でつくった旋律（5グループ）同士をつなぎ、同様に都節音階でつくった旋律（5グループ）同士をつないで、2種類の「日本の音楽カレンダー」がまとまった。つながって一つの音楽になったものを聴いた児童からは、音階やリズムによって変化が生まれ、季節の違いが表現できるよさや、同じ音階を選んでいても、音高の上がり下がりやリズムによって多様な表現ができる面白さについての発言が得られた。また、つなげることによって生まれる音楽のまとまりの面白さについても発言する児童もおり、協働して学習するよさについても実感している様子が見られた。題材全体を通した振り返りをしたところ、図20のような記述が見られた。

ア	音楽の役割や生活の中での働きについて考えたこと
	<ul style="list-style-type: none"> ・昔からいろいろな音楽があって、今に伝えられてきていることが分かった。 ・音楽でその国のよさや楽しさを表せるから、世界とも触れ合えるものだと思う。 ・つくった音楽は日本料理店のBGMとして使ったら面白いと思う。 ・楽しさや嬉しさなども、場面ごとに音楽で表現できそうだった。
イ	学習を通して得られた知識についての記述
	<ul style="list-style-type: none"> ・日本の音楽の秘密は、民謡音階や都節音階など音階の特徴にあることが分かった。 ・使った音階を変えるだけで、旋律から受けるイメージや季節も変わることが分かった。
ウ	次の学びにつながる記述
	<ul style="list-style-type: none"> ・日本の音楽が流れた時、民謡音階なのか都節音階なのかを考えて聴きたい。 ・世界の人たちに日本の音楽のよさや楽しさを伝えるために、日本の音楽をもっと知りたい。

図20 振り返りの記述内容（5年生）

② 振り返りシートの記述から

日本の音楽の秘密を探る学習を通して感じたことや考えたことについて、題材全体を通した振り返りをした。その記述内容を分析したところ、「音楽の役割や生活の中での働きについて考えたこと」「学習を通して得られた知識（日本音階の特徴）についての記述」「次の学びにつながる記述」に分類された。記述内容から、児童は題材の学習を通して、音楽と生活や社会との関わりへの気付きを深めながら、音楽のよさや面白さを追求し実感することができたと考えられる。また、学んだことをこれからの生活に生かしたいか、という質問には、31名中30名が「はい」と回答した。その理由として挙げられた、「日本の音楽のよさを他の国の人に伝えたいから」「外国の人をおもてなしするときに生かしたいから」といった記述から、海外に日本の音楽文化を発信したいという思いや、「落ち込んでいるときに（明るい）民謡音階の曲を聴いて元気になりたいから」などの記述から、自身の生活を豊かにしたいという思いをもつことができたと考えられる。また、「日本の音楽を聴いたとき、どんな音階を使っているかが分かるから」「次は都節音階でも旋律をつくってみようから」などの記述からは、題材での学びを今後の学習につなげようという意欲を喚起することができたと考えられる。

以上のことから、まとめる過程において表現をつないで一つの音楽にまとめる活動を設定し、音楽と生活や社会との関わりを確かめながら題材の学習を振り返ることは、児童が音楽のよさや面白さを実感し、それを今後の学習や生活の中で生かしたいという意欲をもつことに有効であったと考えられる。

VII 研究のまとめ

1 成果

- つかむ過程において、遊びながらわらべうたを歌ったり、祭りの場面を想像しながら太鼓のリズムを模倣したり、民謡（仕事歌）の動きに合わせて発声を模倣したりしながら体験的に音楽に親しむ活動に取り組むことで、児童は体の動きの様子や音楽が生まれた背景を手掛かりにして、音楽のよさや面白さに気付くことができた。その気付きによって、もっと音楽のよさや面白さを追求したいという思いをもつことにもつながり、児童の日本の音楽への興味・関心を高めることができた。
- 音楽を形づくっている要素に加えて、遊びや祭り、仕事や自然などとの関わりについても意識しながら音楽づくりに取り組むことで、表現したいイメージを明確にもち、それにふさわしい旋律の音の動きや、リズムのつなげ方、旋律のまとまりなどを考えることができた。さらに、個々のアイデアを持ち寄り協働して音楽づくりをする活動に発展させることで、お互いの違いやよさを生かしつつ、グループの表現したい思いや意図を伝えるという共通の目的をもって表現を試行し追求することができた。
- グループで追求した表現をひとつにまとめ、学級全体で表現を楽しむ活動を取り入れたことで、児童はみんなで一つの音楽を演奏したり聴いたりして楽しむ一体感を味わい、日本の伝統音楽のもつ働きや役割について考えを深めながら、音楽のよさや面白さをより一層実感することができた。

2 課題

- 児童が日本の伝統音楽への親しみを深めながらよさや面白さを追求することができるよう、児童や地域の実態を十分に把握し、地域により親しまれている音楽を教材曲として扱うなど、それぞれの実態に応じた学習活動や教師の働き掛けの方法を工夫する必要がある。

Ⅷ 提言

1 系統性を考慮した題材構想の活用

今回の実践では、低学年、中学年、高学年のそれぞれ入り口となる学年で題材構想を作成し、活用した。例えば、1年生での実践は2年生での「日本のうたでつながろう」の題材に応用することができる。また、低学年で扱ったわらべうたは、言葉の抑揚と音高が合うよさや、2～3音で構成されるよさを生かし、中学年でのお囃子の旋律づくりでの発想のヒントに生かしたり、高学年の旋律づくりの導入に活用したりする方法も考えられる。学年間の接続を考慮し、弾力的に活用することを提案したい。

2 授業で学んだ音楽を発展させるために

地域の人材を活用し、祭囃子の演奏を実際に聴いたり、箏などの和楽器を使った音楽づくりに発展させたりするなど、本物の音に触れる機会を設けることで、児童の興味・関心を更に高め、より実感を伴った学習が展開できるであろう。和楽器がない場合は、例えば締太鼓をスネアドラムで代用するなどの工夫をすることによって、日本の伝統音楽のよさや面白さに迫ることができるであろう。また、学校生活を豊かなものにするために、例えば給食の時間や清掃の時間の音楽など、生活の中の音や音楽をつくる学習課題を設定し追求する学習も、音楽が生活や社会と深く関わっていることを実感できるものになるであろう。

<参考文献>

- ・文部科学省 『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 音楽編』（2018）
- ・群馬県教育委員会 『はばたくぐんまの指導プランⅡ』（2018）
- ・日本学校音楽教育実践学会 編 『日本伝統音楽カリキュラムと授業実践』 音楽之友社（2017）
- ・津田 正之 小川 公子 著 『「我が国の音楽」の魅力を実感できるワクワク音楽の授業』
学事出版（2020）
- ・文部科学省 編著 『初等教育資料 2020年9月号 No.997』 東洋館出版社（2020）
- ・石上 則子 編著 『小学校音楽遊び70』 明治図書出版（2017）

<担当指導主事>

福島 純子 山田 雅之